

歌謡曲だよ、人生は

2007(平成19)年5月19日鑑賞<テアトル梅田>

★★★★



オープニング『ダンシング・セブンティーン』(1968年) 作詞=橋本淳/作曲=筒美京平/歌=オックス/第1話『僕は泣いちっち』(1959年) 作詞・作曲=浜口庫之助/歌=守屋浩/監督・脚本=磯村一路/出演=青木崇高/伴杏里/六平直政/下元史朗/スタス/第2話『これが青春だ』(1966年) 作詞=岩谷時子/作曲=いずみたく/歌=布施明/監督・脚本=七字幸久/出演=松尾諭/加藤理恵/池田貴美子/徳井優/田中要次/第3話『小指の想い出』(1967年) 作詞=有馬三恵子/作曲=鈴木淳/歌=伊東ゆかり/監督・脚本=タナカ・T/出演=大杉漣/高松いく/中山卓也/第4話『ラブユー東京』(1966年) 作詞=上原尚/作曲=中川博之/歌=黒沢明とロス・プリモス/監督・脚本=片岡英子/出演=正名僕蔵/本田大輔/千崎若菜/第5話『女のみち』(1972年) 作詞=宮史郎/作曲=並木ひろし/歌=宮史郎/監督・脚本=三原光尋/出演=宮史郎/久野雅弘/板谷由夏/第6話『ざんげの値打ちもない』(1970年) 作詞=阿久悠/作曲=村井邦彦/歌=北原ミレイ/監督・脚本=水谷俊之/出演=余貴美子/山路和弘/吉高由里子/山根和馬/第7話『いとしのマックス/マックス・ア・ゴーゴー』(1967年) 作詞・作曲・歌=荒木一郎/監督・脚本=蛭子能収/出演=武田真治/久保麻衣子/インリン・オブ・ジョイトイ/矢沢心/希和/長井秀和/第8話『乙女のワルツ』(1975年) 作詞=阿久悠/作曲=三木たかし/歌=伊藤咲子/監督・脚本=宮島竜治/出演=マモル・マヌー/内田朝陽/高橋真唯/山下敦弘/エディ藩/鈴木ヒロミツ/梅沢昌代/第9話『逢いたくて逢いたくて』(1966年) 作詞=岩谷時子/作曲=宮川泰/歌=園まり/監督・脚本=矢口史靖/出演=妻夫木聡/伊藤歩/ベンガル/江口のりこ/堺沢隆史/寺智智英/小林トシ江/第10話『みんな夢の中』(1969年) 作詞・作曲=浜口庫之助/歌=高田恭子/監督・脚本=おさだたつや/出演=高橋恵子/烏丸せつこ/松金よね子/キムラ緑子/本田博太郎/鈴木ヒロミツ/村松利史/北見敏之/田山涼成/エンディング『東京ラブソディ』(1936年) 作詞=門田ゆたか/作曲=古賀政男/歌=瀧美二郎/監督・脚本=山口晃二/出演=瀬戸朝香/田口浩正(ザナドゥー配給/2007年日本映画/130分)

…… 1960年代前後に大ヒットした12曲の歌謡曲を中心に、11人の監督が11話の物語を大展開！ それぞれの曲のイメージと歌詞から、一体どんな物語が……？ 夢・希望・挫折・青春・思い出などのテーマが、涙あり、笑いあり、サスペンスありの物語の中にてんこ盛り……。『歌は世に連れ、世は歌に連れ』、そんな言葉を思い出しながら、これを機会にあなたの人生をあの曲、この曲とともにふり返ってみれば……。そして、各物語についての、あなたのランキングは……？

第6章

映画で若さを取り戻そう！

オムニバス映画花盛り……

5月16日に開幕された第60回カンヌ国際映画祭の目玉は、世界の35人の監督による3分ずつの短編33本を集めたオムニバス映画『それぞれの映画』。中国の陳凱歌チェン・カイコーや張藝謀チヤン・イーモウ、台湾の侯孝賢ホウ・シャオシエンなどと共に、日本からは北野武監督がこのメンバーとして参加していることも注目点。この映画製作のルールは、テーマを「映画館」とすることと長さを3分間とすることだけで、記念式典の開かれる5月20日に上映されるとのこと。

また私が1月23日に観た『パリ、ジュテーム』(06年)は、昨年の第59回カンヌ国際映画祭の「ある視点」部門のオープニングを飾ったもの。これはパリをテーマとし、1人5分以内でまとめるというルールの下で、18人の監督が思い思いにパリを描いた面白いものだった。

最近の日本のオムニバスものは、2006年12月14日に観た『ユメ十夜』(06年)。これは夏目漱石の『夢十夜』を題材とし、同じ製作費という条件で、10人の監督がそれぞれの視点から「夢」を表現したもの。

今回の『歌謡曲だよ、人生は』は、オープニングの『ダンシング・セブンティーン』を除き、11名の監督がそれぞれ好きな歌謡曲を選び、そのイメージに沿ってそれぞれが自由に監督・脚本したオムニバス映画。ところが、パンフレットを読む限りでは、製作費や時間配分等がどんなルールになっているのか、よくわからない。ちなみに私は、上映中一生懸命時間を計り、メモしようとしたが、周りの迷惑を考えるとダメだった。パンフレットには少なくともそれぐらいの情報は書いてほしいものだが……。

なぜか(当然に?)、知っている曲ばかり……?

11名の監督が選んだ11の歌謡曲は、エンディングの『東京ラブソディ』(1936年)を除いて、すべて1959年から1975年までの曲で、60年代が6曲、70年代が3曲、50年代(といっても1959年)が1曲という構成。私が大学に入学したのが1967年。大学入学後は、朝日放送ラジオの深夜番組『ヤングリクエスト』をずっと聴いていたこともあり、なぜか(当然?)、この11曲はすべてよく知っている曲ばかり。そのうえ、そのほぼ半分は、歌詞も大体オーケー。つまり、それほど私の人生も歌謡曲だったということ……?

競争したがるのが団塊世代……？

団塊世代とは、つまり同年代の人口が多いということだから、生まれた瞬間から競争社会の中で生きていく運命。したがって、団塊世代は何ゴトにも競争好き……？そこで、私は早速この映画における11名の監督の作品の出来を、ランクづけして比べてみた。といっても、第11話の『東京ラブソディ』は、はとバスで東京見物をするだけのごく短いものだから、他の作品と対等に比べるのは酷。そこでこれは番外とし、1話から10話までの作品について、私なりのランキングを発表したい。もちろん、これは私の独断と偏見によるものであることを、念のためお断りしておきたい。各作品について何の紹介もない結論だけでは面白くないので、各作品についての私なりのコメントを書き、最後にランキングの結論を明らかにしたい。

第1話『僕は泣いちっち』

守屋浩の『僕は泣いちっち』は1959年のリリースだから、私が10歳すなわち小学校5年生頃の歌だが、今でもはっきりと覚えている。また第1回レコード大賞受賞曲である水原弘の『黒い花びら』が同じ1959年だが、この曲もはっきり覚えている。もっとも、『黒い花びら』では、「生まれてはじめての甘いキスに……」の意味がよくわからないまま歌っていたこともよく覚えている。また守屋浩はこの曲よりも、1963年に島倉千代子とデュエットを歌った『星空に両手を』の方が私は好きだったが……。

そんな『僕は泣いちっち』の曲のイメージに合わせた作品は、北の国から東京を目指していく男女の愛とその挫折を描いたもの。真一（青木崇高）を残し、先に東京に出ていった沙恵（伴杏里）はダンサーになるべく懸命に頑張っている。そして、沙恵を追って東京へ出てきた真一を明確に拒否。沙恵にとって真一は、既に過去の男になっていたのだった。やはり男はロマンティストだが、女は現実的な動物……？ 真一は、ある出会いからボクシングジムの世話になることになり、失意と怒りをバネに練習に励み、遂にリングに立つことになったが……。

『僕は泣いちっち』という曲とその歌詞に、ハッピーエンドが似合わないことは明らか。しかして、こんなに頑張って東京を目指した男女の結末は……？

第2話『これが青春だ』

私の大学入学は1967年だから、1966年に布施明が歌ったこの歌は、大学受験のラストスパートの時期。同じ1966年でも、第4話の『ラブユー東京』や第9話の『逢いたくて逢いたくて』は歌詞までよく覚えているが、『これが青春だ』を私はあまりちゃんと覚えていない。それは第1に、この曲は竜雷太主演のテレビドラマの主題曲だったらしいから、テレビドラマを全く観ていなかった私にはなじみが薄かったため。第2に『霧の摩周湖』のように大ヒットしなかったので、ラジオで流される機会が少なかったため……？

それはともかく、エアギターをテーマとしたこの第2話の私の評価はかなり下。冴えない大工の若者、藤木貢（松尾諭）が、ある日現場を訪れてきた施主さんの美しい娘恵理（加藤理恵）に一目惚れ。それはよくある話だが、失敗ばかりで落ち込んでいた藤木が、ある日手にしたエアギター選手権のチラシを見て一念発起。それはそれでいいのだが、藤木は大事なところで2度までも、文字どおり「せっちんづめ」に……？ 私は無理矢理笑いをとるような筋立ての映画は、基本的にキライ。したがって、この作品は私にはダメ……？

第3話『小指の思い出』

伊東ゆかりの『小指の思い出』は、1967年の大ヒット曲。そのうえ、その思わせぶりの歌詞を考えれば、こりゃ映画化に絶好の曲。もっとも、最適なのは、かつての日活ロマンポルノ……？

私と同世代のタナカ・T監督のイメージもどうもそんなところにあったようで、仕事が終わって家にたどり着いた初老の男（大杉漣）と、これを迎える若い女性（高松いく）の間には、かなり不思議な雰囲気が……？ 甲斐甲斐しく男に食事の用意をする若い女性を見ていると、一瞬うらやましく、また「えっ、どうして？」と思ってしまったが、やはりこれは現実ではなかったよう……？ したがって、物語はその後次第にホラー的に……？ こんなストーリーも、私は基本的にキライ……。

第4話『ラブユー東京』

『ラブユー東京』のイメージは洗練された都会風のものだが、女流監督の片岡英子

が描くのは、奇妙な古代の世界。古代に生きている2人はどうも恋におちたようだが、私が気に入らないのは、その女がどう見ても男の顔に見えるところ……？ そしてある日、火山が噴火し、大地震が起り、世の中は大変化。そしてスクリーンは、現代の東京へ……。

映画はこういうことが自由にできるから便利だが、あまり乱用するのはいかがなもの、思わず私はそう思ってしまったが……？ こんな古代世界と現代の東京を結びつけるものは巨大な石像だが、現代の東京で古代の男がめぐり会うのは1人のヤクザな男（正名僕蔵）、そしてもう1人は石像の清掃夫（本田大輔）。こりゃまたなぜ……？ 私には『ラブユー東京』という曲とスクリーン上の物語が、全然マッチしていないと思ってしまったが……。

第5話『女のみち』

全11曲のうち唯一のド演歌が『女のみち』だが、それを徹底させるかのように、その歌手である宮史郎が入れ墨姿で宮田次郎役で登場。もっとも話は至って単純で、サウナの中に入ってきた宮田次郎が、『女のみち』の忘れた歌詞を思い出すべく、先に入っていた高校生の正治（久野雅弘）に絡む(?)もの。

サウナ室で1人座っている時、入れ墨だらけの男がいきなり入ってきて隣りに座られたら、ビビるもの。私は逆に、たまたま入っていったら背中が入れ墨だらけの男が座っていたのに遭遇してビックリしたが、すぐに出ていくわけにもいかず、じっと我慢してその隣りに座っていた経験がある……。それはともかく、人間は限界状態までギリギリ自分を追い詰めれば何らかの解決が得られるもの……？ やっと「初心なお前の……」という歌詞を思い出したのはいいのだが、その後の銭湯での宮田サンのおんステージは一体ナニ……？ このように、この作品もかなり低評価……。

第6話『ざんげの値打ちもない』

阿久悠作詞のこの曲は、少しミステリアスなテイストが似合いそう。そんな私の予想や期待どおり、余貴美子が主演した第6話は、不動産屋を営む女の元を訪れてきた腐れ縁の男（山路和弘）を殺害するというシリアスなサスペンスタッチのつくりとなっている。そして、短い作品ながら、もう1組の若い男女関係のもつれを描き、ここでも危うく殺人事件が起りそうになるという盛りだくさんぶり……？ そんな2つ

の物語が展開された後訪れる結末は……？ こりゃちょっと暗いけれども、まさにこの曲のタイトルにピッタリのイメージ……。

第7話『いとしのマックス／マックス・ア・ゴーゴー』

大学に入学した1967年に大ヒットしたのがこの『いとしのマックス』だが、私はこのアップテンポの曲よりもバラードの『空に星があるように』の方が好きだった。この曲は、ヘタなギターを弾きながらよく歌っていたもの……。

『いとしのマックス』のイメージは、当時大人気だった若大将、加山雄三のお坊っちゃま風学園生活とは正反対の若者の暴走……？

これが監督2作目となる漫画家の蛭子能収もそんなイメージで、この作品を監督・脚本したのだろうが、その出来は最悪！ デザイン事務所の中でいじめられているOL 良子（久保麻衣子）を救うため、同僚の一郎（武田真治）が発奮するという筋立ては悪くないのだが、何せやるのがハードボイルドタッチというかグロテスク……？ 最初に同僚のOL 3人組が良子を下着姿にしていじめているシーンも悪影響を与えそうだが、劇画マンガと大量の血を流すシーンをスクリーン上に交互にくり返すのも、教育上よろしくなさそう……。さらに、返り血で顔を真っ赤に染めた一郎が、「真っ赤なドレス」を着た良子を抱き寄せ、いきなりダンスを踊り出すのもバカげている……。こりゃ、その後の作品を観なくても、自信をもって最下位に内定させたが……。

第8話『乙女のワルツ』

伊藤咲子の『乙女のワルツ』は、彼女のデビュー曲である『ひまわり娘』とともに私の大好きだった曲。1975年という年は、私が弁護士登録した1974年の翌年で、この頃は『スター誕生』をはじめとするテレビの歌謡番組をよく観ていたもの。伊藤咲子は柏原芳恵と同じような期待の大型新人だったはずだが、なぜかその後は……？

5～10分の短編モノをまとめるには、過去と現在を交差させる手法が有効……？ 喫茶店のマスターであるマモル（マモル・マヌー）が今日の前にしているのは、常連客の若者が連れてきた美しい彼女。これがマモルの昔の彼女とそっくりだったため、マモルはたちまち若き日の思い出の世界に入っていくことに……。若い頃、マモル（内田朝陽）はバンドでドラムを叩いていた。そんな時、店で知り合ったのがリカ

(高橋真唯)。2人は楽しい日々を送っていたが、ある日マモルがバンド仲間とケンカした時、仲裁に入ったリカはその場で倒れてしまった。リカは重大な病気に冒されていたのだ。そして今、目の前にいるあの頃のリカにそっくりな女性は……？ そう思っていると目が覚め(?)、話は突然現実……。すると、今マモルの目の前にいるのは何のことはない、自分と同じようにくたびれた中年女となった女房(梅沢昌代)の姿。一瞬、リカだと錯覚した美女はボックス席で常連客の若者と楽しく語り合っていた。ああ、俺の若かった青春ははるか昔のこと……。そんな物語が、『乙女のワルツ』の曲に乗ってほのぼのとした香りを……。

第9話『逢いたくて逢いたくて』

園まり、伊東ゆかり、中尾ミエの「3人娘」の中で、当時最も美人で魅力的だったのは園まり。しかし、年月が経つにつれてその順位は変動するもので、今や還暦近くになると伊東ゆかりの魅力が断トツ……。これは「花の中3トリオ」森昌子、桜田淳子、山口百恵の中で1番見栄えの良くなかった(?)森昌子が、50歳を超えるとそれなりに落ちつきたい顔になっているのと同じ……？

それはともかく、この第9話は、矢口史靖監督が妻夫木聡と伊藤歩という人気俳優を起用した作品。出演料を含めたこの作品の製作費は、他の作品と同じ……？

『逢いたくて逢いたくて』というタイトルと歌詞から見て、これは絶対映画化に向いている曲。そこで、矢口史靖監督が描いたのは、引っ越してきた若き鈴木夫妻(妻夫木聡、伊藤歩)と前の入居人であった五郎丸(ベンガル)にまつわる奇妙な物語……。五郎丸が廃棄した文机を高志(妻夫木聡)が拾ってくるというのは、今ドキありえない貧乏くさい物語だが、それ以上に奇妙なのは、その文机のカギのかかった引出しの中から大量の手紙が出てきたこと。同一人物の女性に宛てられたその手紙は、基本的に同一文面で、いわばストーカー的に交際を迫っている内容。勝手に手紙の封を切ってそこまでの情報を集め、興味本位の話題としていた鈴木夫妻だったが、引越しパーティーにやってきた友人たちの直後に、なぜかその五郎丸も登場。そしてひとしきり話題が盛り上がり、五郎丸が去った後、この部屋に届けられたハガキは何とその女性から五郎丸に宛てられたもの。そして、その文面は……。さらに、その後エンディングに向けてのストーリー展開は……？

園まりがしっかりと歌った曲のイメージとはかなり違うアップテンポな作品になっ

ているが、『逢いたくて逢いたくて』の曲の基本的コンセプトは貫徹……？ したがって、そのランキングは上位だが、ベスト3はムリ……？

第10話『みんな夢の中』

本作が監督第1作となるおさだたつや監督は、『みんな夢の中』という曲のイメージどおり、同窓会に集った50代の男女が小学生時代を思い出すという世界を描いた。出演者は高橋恵子がビッグネームだが、この作品では特に彼女を主演とせず、9名の出演者をほぼ横一線に……。

面白いのは、約40年前に校庭に埋めたタイムカプセルの中に入っていた8mmの上映という趣向。40年間も埋められたままで無事に保存できるのかどうか若干疑問だが、1人ずつ「僕の夢、私の夢」を語る小学生の頃の姿に、出演者は全員感無量……。そんな時、ピエロに導かれるように教室から校庭を見ると、そこには同級生の鉄太郎が小学生の頃の姿のまま……。

さて、注目のランキングは……？

私のランキングは、良かった順に①『乙女のワルツ』、②『みんな夢の中』、③『僕は泣いちゃ』、④『ざんげの値打ちもない』、⑤『逢いたくて逢いたくて』、⑥『小指の思い出』、⑦『これが青春だ』、⑧『女のみち』、⑨『ラブユー東京』、⑩『いとしのマックス』。

ちなみに、当日一緒に観た妻のランキングは、①『僕は泣いちゃ』、②『ざんげの値打ちもない』、③『逢いたくて逢いたくて』、④『乙女のワルツ』、⑤『小指の思い出』、⑥『女のみち』、⑦『いとしのマックス』、⑧『みんな夢の中』、⑨『これが青春だ』、⑩『ラブユー東京』。

傾向はおおむね同じだが、大きく異なるのは『いとしのマックス』の評価。私は「こんなグロテスクな映画はダメ」と言ったのに対し、妻は「スカッとして気持ちよかったやん……」との評価。やはり男と女とでは、いじめや血に対する抵抗感が違うのかも……？

2007(平成19)年5月21日記